

Ⅱ－３ 高等部の実践

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

Ⅱ－3 高等部の実践

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

1. はじめに	73
2. 事例1	
(1) 対象生徒の実態	73
(2) 大目標設定の経緯	73
(3) 個別の指導計画	75
(4) 実践の経過	75
(5) まとめと考察	81
3. 事例2	
(1) 対象生徒の実態	84
(2) 大目標設定の経緯	84
(3) 個別の指導計画	85
(4) 実践の経過	85
(5) まとめと考察	90
4. 事例3	
(1) 対象生徒の実態	93
(2) 大目標設定の経緯	94
(3) 個別の指導計画	95
(4) 実践の経過	95
(5) まとめと考察	97
5. まとめ	101

V. 高等部の実践

1. はじめに

高等部では、テーマを「生徒の『なりたい自分』を支援する取り組み」として3年間研究に取り組んできた。学年毎に対象生徒を一人選んで、本人とやりとりをする中で生徒の「やりたいこと」や「なりたい自分」を探り、それをもとに目標を設定し、本人と保護者と教師がその目標を共有することで、教師の支援がよりの確になったり、生徒自身が学校や日常生活において意欲的に活動に取り組むようになってきたりすると考えた。生活機能モデルで目標に対する実態を把握し、以下の3点を軸として個別の指導計画を作成したり実践を行ったりした。

- ・生徒の「やりたい、なりたい」をもとに目標を設定し本人・保護者・教師で共有する
- ・生徒の「やりたい、なりたい」を叶えることがねらいではなく、教師がその願いに寄り添いながら、生徒が目標に向かって取り組めるよう支援する
- ・支援によって生徒自身が既有知識を更新し、自己認識を更新・拡大することを大切にする

その中で生徒自身が自分の「やりたい、なりたい」に関する知識を更新し目標を修正する姿や、より現実的で実現可能な次の目標をたてる姿を見ることができた。

2. 事例1 A男の「将来のイメージをつくる」ことを支援する取り組み

(1) 対象生徒の実態

高等部1年の対象生徒A男の実態は、次のとおりである。

- ・小学部から本校に在籍している
- ・診断名は、自閉症である
- ・中学部までは、自分の思いが通らなかったり、予定外のことに遭遇したりすると混乱することが多かったが、高等部に入ってから、とても落ち着いており、混乱することは見られなくなっている
- ・日常生活動作は、概ね自立している
- ・電車と路線バスを利用して、自主通学をしている
- ・算数の計算力は、小学3～4年程度である
- ・放課後は、陸上クラブ（週3回）、軽音楽クラブ（週1回）、トランポリンクラブ（週1回）に参加している
- ・バレエ教室（日曜日月2回）にも参加しており、課外活動は積極的である

(2) 大目標決定の経緯

①本人の望み、願い

ア. 普段の言動から

A男は、学習に対して意欲があり、自分は「勉強ができる」というプライドも高い。中学部3年の終わり頃から「金沢大学附属高校に行きたい」と口にするようになった。母親

に話を聞くと、中学部３年の時に金沢大学附属中学校との学校間交流があり、附属中学校の女子生徒から「附属高校に行こうね」と言われたそうで、それがＡ男にとって強く印象に残ったようである。その時には、Ａ男は本校高等部への進学が決まっていた。

高等部入学当初は、「僕は、本当は附属高校に行きたかった」「副校長先生と面接をしたい」とよく口にしていた。Ａ男の言動に対する周囲のひんしゅくには全く気づかず、「附属高校に行く」と事あるごとに公言していた。４月に生活単元学習で行った今年度の目標作りで、Ａ男は「附属高校へ行きたい」と書いた。

また、「アイドルになる」「研究者になる」と言うこともあった。

イ．学級担任とＡ男との面談から

Ａ男の望みや願い、現在考えていることなどを知るために、担任とＡ男との個別の面談を繰り返し行った。その際、Ａ男は次のようなことを言っていた。

- ・附属中学校や附属高校には、友だちが１００人いる
- ・ドリルを一からやり直したい。そうすれば僕はできる
- ・難しい勉強をすれば頭がよくなる
- ・畑仕事（作業学習）より勉強がしたい
- ・現場実習※には行きたくない

（※本校では、「産業現場等における実習」を「現場実習」と記す。以下同じ）

- ・知っている高校の名前は、金沢大学附属高校の他に、金沢泉丘、遊学館、野々市明倫、金沢二水、金沢商業等である
- ・軽音楽クラブでボーカルをすれば、アイドルである
- ・自分の長所は、勉強を頑張っているところである
- ・自分の短所は、わがままなところである
- ・僕はえらい、僕はすごい

②保護者の望み、願い

Ａ男の「附属高校に行きたい」という思いに対して、母親は、学習意欲を継続させるためにも、附属高校へ行くことは無理であるとはこれまで告げず、見守ってきた。今後については、学習意欲をもちながら、就職に向けてスムーズに進んで欲しいと願っている。

③教師の願い

Ａ男の「附属高校に行きたい」という思いに対して、教師は次のことから現実離れしていると考えている。

- ・学力面では、計算が小学３年程度であり、一般の高校や附属高校に合格することはかなり難しい
- ・知的障害のある児童生徒に対する教育課程を小学部から履修しており、高校入試で出題される内容の多くを学習していない
- ・高校生になっている今から、高校入試からやり直すことは非現実的である

また、Ａ男の現状について、教師が問題意識を持つのは、次のようなことである。

- ・自分の思いと現実との区別がつかない
- ・本人の思いと学力との間にギャップがある

- ・自分の思いが強くて、自分のことを客観的に把握することができない
- ・自分の思いを話し出すと止まらない
- ・清潔面や生活リズムに問題がある

A男は、自分のことを客観的に把握することができず、理想ばかりが先行している。教師は、A男に対して、「もっと現状を把握し、自己認識を高めて欲しい」「将来のことも視野に入れ、働くことにも目を向けて欲しい」と思っている。

④大目標の決定

①～③を受けて、

- ・A男の「附属高校に行きたい」という思いに対しては、大人が頭ごなしに否定するのではなく、予備知識を伝えたり、体験活動を設定したりすることによって、A男自身が現実的な願いをもてるようにしていきたい
- ・高等部に入学したので、作業学習や現場実習を通して、A男が働くことに目を向けるようにしていきたい

と考えた。そこで、大目標を「将来のイメージをつくる」とした。

(3) 個別の指導計画 (紀要 82 ページ参照)

(4) 実践の経過

個別の指導計画に基づいて、小目標を達成するために行った活動の経過を小目標の順に報告する。

小目標① 高校生に対するあこがれや自分の思いを整理する

①学級担任とA男との面談

大目標を設定するために、学級担任がA男と面談を繰り返し行ってきたが、A男の思いをより深く把握するために、大目標設定後も引き続き面談を行った。A男との面談で聞き取ったことは、高等部研究会で報告し、高等部の職員全員で共通理解をした。また、A男の発言は随時整理し、その中で出てきた疑問を、次の面談でA男に質問することにした。これらを繰り返すことで、新たに次のようなことが分かってきた。

- ・A男が「難しい勉強をしたい」のは、「デメリットを少しでも減らすため」である。デメリットとは、「友だちが少ないこと」である。「同じ年齢の友達を中心にいっぱい欲しい」と思っている。
- ・登下校時の途中で、他校の生徒が集団で楽しそうにしている姿を遠くから眺めて、うらやましく思っている。
- ・本校の生徒同士で休日に出かけることには、乗り気でない。

②附属高校開校祭への参加

高等部では、附属高校で10月に実施される開校祭に希望者が参加し、作業学習の製品を販売したり、催し物の見学や参加をしたりしている。A男も1日目に参加し、販売活動では、硬い表情ではあったが、お客様から商品を受け取ったり、商品やお釣りを渡したりしていた。自由時間には、一人で校内を回り、催し物の様子を眺めることが多かった。販売

活動をした1日目だけでは物足りなかったようで、2日目も開校祭を訪れ、クイズラリーをしたり、模擬店で飲食したりしたようである。翌日、学校で書いた感想は次のとおりである。

○開校祭で販売体験をしてどうでしたか

「とても充実した体験でした。うらやましかったです。」

○開校祭の催し物に参加してどうでしたか

「学校内で探検してクイズラリーに参加しました。チザワンダーランドでは、野菜スープを飲みました。附属高校の生徒のせいで、とてもうらやましかったです。」

小目標② 自分の勉強のレベルを知る

① 普段の学習活動から

ア. 漢字・計算ドリルを使った自主的な学習

高等部入学当初、A男が「附属高校に行きたい」「副校長先生と面接をしたい」と頻繁に言っていたので、学級担任は母親に対して、「母親からA男に対して、高校入試のことを伝えて欲しい」と伝えた。

それを受けて、母親とA男は、書店に行き、公立高校の入試の過去問題を立ち読みした。そして、漢字・計算ドリルをまずは小学1年の問題集から購入し、学校の休み時間や自宅での自由な時間等で取り組み始めた。学校の休み時間には、他の生徒がドッジボールに誘っても、それを意に介さず、黙々と取り組んでいた。その頃には、「副校長先生と面接をしたい」とは言わなくなった。

しかし、10月中頃から、学校の昼休みにドリルではなく、他の生徒と一緒に楽しそうにドッジボールをするようになった。A男に聞くと、10月中頃から家でもドリルをしなくなったとのことである。その理由については、次のように述べている。

「昼休み、ドッジボールをしたいので。ドッジボールが楽しいから。」

「家では、すぐに時間が経って…。」

イ. 朝自習

高等部では、朝の会までの10分間に、朝自習の時間を設けている。生徒の参加は任意としていて、漢字や計算のドリル、文章のなぞり書き等の課題を個に応じて行っている。A男は、高等部入学当初から朝自習に毎日取り組んでいた。小学2年程度の計算問題から開始し、徐々に難しい問題へと進んでいった。しかし、A男は、10月からほとんど朝自習に取り組まなくなった。この頃は、現場実習などの行事があったり、給食委員会の朝の仕事が加わったりしていたが、小学4年程度の割り算の筆算でつまづいていた時期でもあった。

ウ. 作業学習での収支計算

作業学習で、11月に作業会計の収支を計算することがあった。黒板に書かれた品目(12品)と金額をメモ用紙に書き写し、支出の合計金額を計算した。A男は、2品ずつ暗算で計算したため、大変時間がかかり、計算結果も3箇所間違っていた。教師がA男のメモ用紙を見て、計算間違いの箇所を指摘すると、大変がっかりした様子であった。普段は、自分の失敗をなかなか認めない様子であるが、この日は言い訳をせず、自分の失敗を素直に受け入れているようであった。

②公立高校入試問題（過去問題）の実施

10月に、A男が昨年度の石川県公立高校入試問題を解く機会を設けた。実際の試験に近い設定で行いたいと思い、会議室で各教科50分間行った。試験前には、高校入試のシステムや、本人が行きたい県立高校（附属高校と学力レベルに近い県立高校）に合格するために必要な点数等を一緒に確認した。試験中は、試験問題のほとんどがA男の学習したことのない内容であるにもかかわらず、自分のできる範囲で懸命に問題を解こうとする姿が見られた。試験後は、その日のうちに採点結果を伝え、振り返りも行った。結果は、5教科合計で24点であった。行きたい高校に必要な点数とは大きくかけ離れていることが分かったようである。試験後の感想は、次のとおりである。



入試問題を解くA男

○試験直後の感想

「難しかったです。でも何回も挑戦したいです。」

「テストを何回もしたら慣れて意味も分かって、成功につながる。」

○テストの結果を知っての感想

「非常に残念でありました。でもあきらめないで頑張りたいです。」

また、振り返りをしていた時に「来年の3月に高校入試を受けたい」と言ったり、別の日に「10年以内には高校に合格したい」と言ったりしていた。

学級担任が小目標②を立てた時には、「A男は、高校入試があることや、希望する高校の合格点に満たないと入学できないことを知っている」という前提で実践を進めてきた。しかし、A男の思いについて分析していく中で、A男は「希望する高校に入学するためには、入学試験を受けて合格することが必要である」ことを高等部入学当初は知らなかったのではないかと推測された。また、勉強をすることの動機について、選択式のアンケートを後日行ったところ、「勉強はしないといけないから」「友だちが欲しいから」を選んでいて、学級担任が前提としていた「附属高校に入りたいから」「できない問題ができるようになるとうれしいから」という認識と違っていたことが分かった。

また、A男は10月頃から、ドリルを解くことよりも、他の生徒と一緒に遊ぶことに興味が移ってきている。

そこで、今後は、A男の高校入試に対する既有知識や勉強に対する思いを改めて整理した上で、A男の現在および将来にとって必要十分な勉強量、内容、時間等をA男と一緒に計画していきたいと考えている。

小目標③ 仕事の可能性を知る

①作業学習

A男は、高等部入学当初、「現場実習に行きたくありません」「畑仕事（作業学習）よりも（教科の）勉強がしたい」と言っていた。しかし、作業学習（菜園工房）では、特に参加を嫌がる素振りはなく、栽培作業全般に意欲的に取り組もうとする態度が見られた。野菜や用具の名前を伝え、それを覚えるようで、何日か後に教師が訪ねると、正しく答

えられていた。用具類の使い方や野菜を栽培する際の一つの作業についても、少しずつ見通しがもてるようになっていく。



作業学習中のA男

②生活単元学習「アルバイトについて知ろう」

9月の教育実習期間中に、高等部1年の生活単元学習で「アルバイトについて知ろう」という単元を設定し、授業を行った。高等部1年生にとって初めての現場実習（10月）を控えた時期に、教育実習生が実際に行っている仕事（アルバイト）について、直接話を聞いたり、模擬体験をしたりした。A男は、スーパーマーケットで現場実習を行うことが決まっております（詳細については後述）、スーパーマーケットやコンビニエンスストアでの仕事のことを興味深そうに聞いたり、模擬体験をしたりしていた。単元の最後に、生徒に感想を書いてもらったところ、A男は次のように書いていた。

○単元の振り返りの感想

「僕が店員をやりたい事は、接客を中心に、掃除や商品の補充をやりたいです。いつか僕も学生さんになったら、僕もコンビニのアルバイトを頑張りたいです。」

③現場実習（産業現場等における実習）

ア．現場実習先決定までの様子

本校では、高等部1年の10月に、生徒にとって第1回目の現場実習を行っている。現場実習前の実習先希望調査（8月）では、A男と母親が相談して、高等部2・3年の生徒が前期現場実習（6月）で実習した企業3社の名前を挙げていた。進路指導担当者は、このうち、本校の近くにあるスーパーマーケットN社を候補にした。N社は、本校生徒の現場実習の受け入れが2回目であることや、中学部3年生の職場体験実習の受け入れも経験していることから、A男の実習先として妥当であると判断した。

スーパーマーケットN社で現場実習を行うことが決まり、進路指導担当者がA男に伝え、A男はすんなりと受け入れていた。

イ．後期現場実習での様子

A男は、スーパーマーケットN社で野菜の袋詰め等の仕事を4日間行った。実習中は、野菜の袋詰めや値札シール貼り、ダンボールの片付け等の仕事を行った。青果部門の担当者の手本や完成品を手がかりに、それぞれの仕事を一つ一つゆっくりと行っていた。



現場実習中のA男

ウ．後期現場実習報告会での様子

実習後の報告会で、A男は、次のように報告していた。

頑張ったこと	野菜や果物の袋詰めや、値段貼りやダンボールの箱折りを頑張りました。
大変だったこと	立つことが大変でした。
実習で学んだこと	最初は大変だったけど、慣れるにつれ、どんどん簡単になりました。

また、他の生徒の現場実習の様子を聞いて、次のように言っていた。

- ・いろいろな仕事をしてみたい
- ・難しい仕事をしてみたい

(具体的には、高等部3年の生徒が実習した、織機部品の組み立てやレンタルDVDの棚への返却などをしてみたい)

エ. 進路指導担当者との面談

現場実習を終えてから2週間後に、進路指導担当者がA男との面談を行った。実習の振り返りをすると、A男は、実習の期間や仕事内容をはっきりと言うことができた。また、今後の現場実習に向けて、次のようなことを言っていた。

- ・野菜の袋詰めは簡単な仕事だ
- ・接客やレジの仕事もしてみたい
- ・いろいろな仕事を体験したい
- ・部品の組み立ての仕事もしてみたい
- ・芸能界でも実習してみたい

また、スーパーマーケットN社の店長からの評価は、次のとおりであった。

- ・A男の集中力から判断して、複数の作業を覚えられる可能性がある
- ・今後の課題は、長時間の立ち仕事ができるように体力を付けることと、正確に作業を行うことの2点である

A男の自己評価と実習先の評価とを比べると、体力面では、両者ともに同じ評価でA男の自覚が見られるが、作業の正確さでは、本人の評価が店長からの評価に比べてとても高いのが目立った。

小目標④ 自分の得意なことや不得意なことについて考える

①生活単元学習「大切な9人」

10月に、高等部1年の生活単元学習で「大切な9人」という単元を設定し授業を行った。単元を設定した時の教師の思いは、次のとおりである。

- ・同じクラス(学年)で生活している生徒9人は、一人一人がかけがえのない大切な存在であることを知って欲しい
- ・生徒一人一人が自分や他の生徒のことをどのように捉えているかを知りたい

また、単元の内容は、次のとおりである。

ア 自分の名前の由来、これまでのエピソード、生徒に対する思いを家族に書いてもらい、「一人一人が大切に育てられた命である」ことを知る

イ 自分の長所、短所を書く

ウー1 他の生徒の「いいところ(長所)」を紙に書く

(教師が、長所が書かれた紙を全員の前で発表したり、掲示したりする)

ウー2 他の生徒の「もっとこうしたらよいと思うこと(短所)」を紙に書く

(教師が、短所について書かれた紙を発表する。その際には、誰が書いたかわからないようにしたり、やさしい口調で伝えたりする。)

エ 自分の長所と短所について、家族に書いてもらう

オ イ～エを受けての感想やこれから頑張りたいことを書く

イ～エの活動を通して、A男の長所・短所についてまとめられた表は、表V－1のとおりである。（本人の欄は、公立高校入試の過去問題を解く前に書いたものである）

A男は、自分の長所として「勉強は得意である」とした。一方で、自分の短所については空欄であった。他の生徒からは、「直したらよいところ」として、「転校のこと（『附属高校に行きたい』と言うこと）ばかり話す」ということが挙げられていた。それ以後、他の生徒の前で「附属高校に行きたい」と言ったことはないようである。

表V－1 A男の長所と短所（本人、家族、仲間がそれぞれ記入したもの）

	本人	家族	仲間
長所	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強は得意である。 たし算・ひき算・かけ算・わり算も得意である。漢字も得意である。英語も得意である。地理も得意である。地図も得意である。歴史も得意である。 ・東京にあこがれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何事も意欲的に取り組む 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育を頑張っている ・陸上部も頑張っている
短所	（空欄）	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ話を何度でも話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・転校のこと（「附属高校に行きたい」）ばかり話す ・おしゃべりし過ぎる

オの活動で、表V－1を見ての感想や今後頑張りたいことを次のように書いた。

○家族や仲間たちからのことばを聞いて、どう思いましたか？

「こういうのも悪かったと思っていた。僕が悪いと思った。」

○これから、どんなことをがんばりたいですか？

「同じ話をしないで、違う話をします。」

「関係のない話をしないで。」

「黙っていればいい男だから、他の話の最中に黙ります。」

A男の「僕が悪い」「関係のない話をしないで」という断定的な表現から、A男が「自分はすべて悪い」「話をしたらいけない」と全否定しているような印象を教師が受けたので、「A男が全部悪いのではなくて、先生が話をしている途中で割り込むことだけが悪いのだよ」「先生が『A男さんはどう思いますか？』などと聞かれた時に話をするのはいいのだよ」と伝えた。それを聞いたA男は、腑に落ちない表情をしていたので、教師が「よく分からなかったですか？」と聞くと、A男は「もう一度言って下さい」と言っていた。A男が理解できるように、絵や図を使って示したり、機会を利用して指導したりする必要性を感じた。

A男にとって、他の生徒（特に高等部から本校に入学してきた生徒）から評価を受けることは、おそらく初めてのことであり、印象に残ったようである。このことは、「転校のことばかり話す」との指摘を受けてから、他の生徒の前で「附属高校に行きたい」と言わな

くなったことから推測される。

また、A男の自己評価は、「全て肯定する」か「全て否定する」かであり、「条件付きで肯定する（否定する）」ことや「人格を評価しているのではなく、行動を評価している」ことを理解することが難しいようである。このことを踏まえた上で、A男がより現実的な自己認識をもてるように、今後も支援を行っていきたい。

5. まとめと考察（生活機能モデル 紀要 83 ページ参照）

A男の大目標「将来のイメージをつくる」に対して、現在のA男は、高等部に入学してから約半年間ということもあり、自分が働きながら生活していくといったイメージをもつまでには到っていない。

しかし、A男の行動に変化が見られているので、A男への聞き取りや行動観察を引き続き行うことで、A男の行動や内面の変化を見守っていきたい。

また、A男にとって必要と思われる情報を意図的に伝えたり、他の作業種や学校以外での作業を体験する機会を設けたりして、A男が既有知識や自己認識を更新していけるように支援していきたい。

その結果、A男が等身大の自分を受け入れ、それに見合った将来のイメージをもてるように、今後も引き続き取り組んでいきたい。

大目標: 将来のイメージをつくる

小目標

①高校生に対するあこがれや自分の思いを整理する
 ②自分の勉強のレベルを知る
 ③仕事の可能性を知る
 ④自分の得意なことや不得意なことについて考える

小目標に対する実態

①登下校時に、電車の中や繁華街で高校生の集団の様子を遠くから見ていて、うらやましく思っている
 ②勉強を続ければ、金沢大学附属高校に行けると思っている
 ③働くことにあまり興味を持っていない
 ④自分の長所:勉強を頑張っているところ
 自分の短所:わがままなところ
 自分が自閉症であることは知っている

小目標を達成するために何をするか(具体的な内容)

①教師と一緒に、自分の思いを言語化する。
 ②過去の公立高校入試問題を解く。結果を数値化したり、視覚的に確認したりする。
 高校に入るためのシステムを知る。
 ③作業学習、職場見学、現場実習等をする。
 大学生のアルバイトについて聞いたり、模擬体験をしたりする。
 ④自分の得意なこと、苦手なことを言語化する。
 生徒同士でお互いのいいところを伝え合う。

小目標に対応する教科・領域等

教科・領域等	※	目 標	学習内容・手だて	様子・評価・次の目標等
国語	②	漢字問題や文章問題に答える	・説明文や物語文を読んで答える	
数学	②	生活に密着した数について学ぶ	・2桁×2桁の暗算 ・水のかさ ・多い数 ・身近なものの単位	
学作 習 業	③	作業内容によって必要な道具を用意する	・野菜の栽培(小麦、ニンジン、大根、里芋など)	
職業	③	自分のなりたい職業を考える	・多種多様な職業について ・自分の適性を知る	
生活 学習 単 元	① ③ ④	・仕事の話や模擬体験を通して、自分が働くことのイメージをつかむ ・自分の得意なことや苦手なことを知る	・働くことについて知ろう(教育実習生のアルバイト) ・大切な9人 ・いろいろな仕事 など	

大目標に照らし合わせた評価(子どもの内面の成長とそこでの教師の役割も併せて記入する)

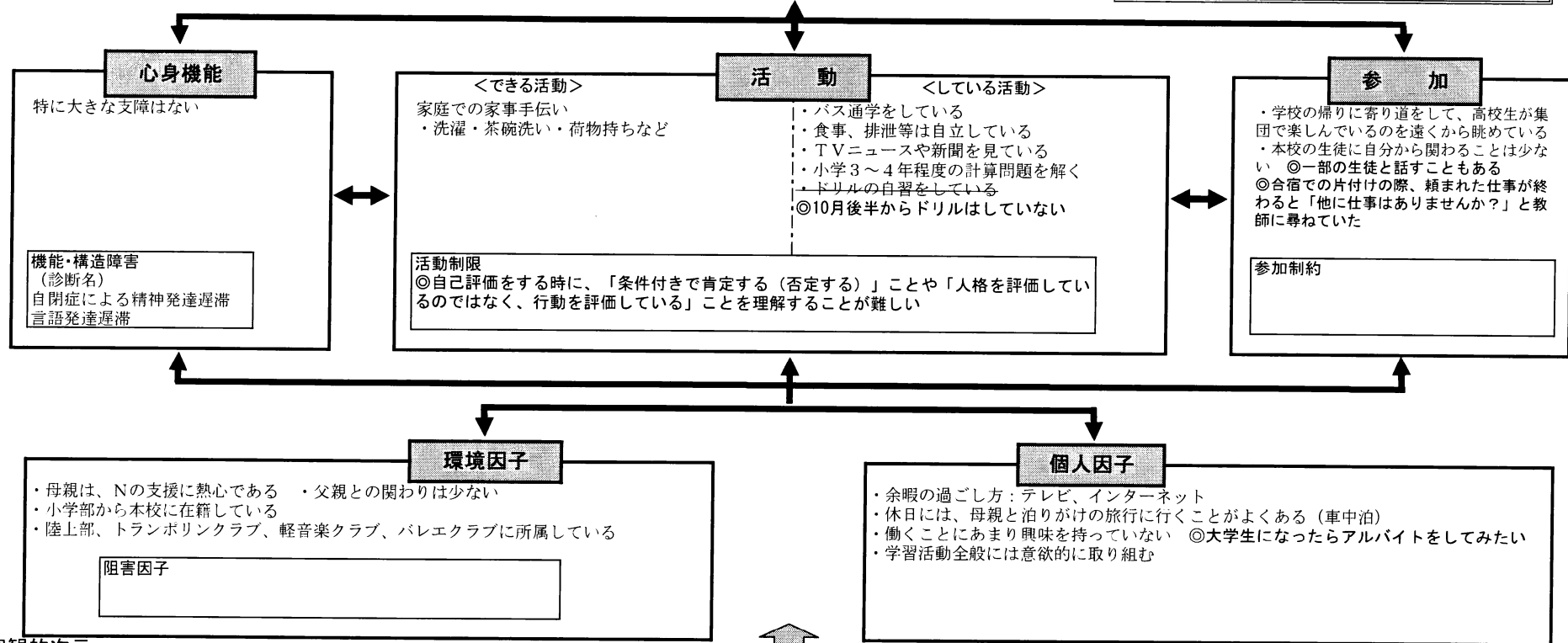
次の大目標または今後の授業での取り組み

大目標「将来のイメージをつくる」についての生活機能モデル

氏名: A

性: 男 年齢: 高1

<p>健康状態</p> <p>良好である</p> <p>病気 なし</p>	<p>※前期個別の指導計画作成時に作成したものを元に、後期作成時に見直しを行った ※取り消し線表記は前期から後期にかけて変化した、または無くなったと考えられる項目 ※ゴシック体表記(◎)は後期個別の指導計画作成時に新たな姿として認められた項目</p>
--	---



客観的次元
主観的次元

<p>主観的体験</p> <p>・金沢大学附属高校へ行きたい ◎附属高校に入ることは、今は学力的に難しいが、何年か勉強を続ければ行ける。あきらめない ・アイドルになりたい ・車の免許を取りたい ・同じ年齢の友達をたくさん欲しい ◎昼休みにはドッジボールで遊びたい ◎学校帰りに友達と寄り道をしたい ◎現場実習は大体できた ◎別の仕事も体験してみたい こころの悩み、現状への不満など</p>

(上田、大川、2005)

3. 事例2 B男の「一人暮らしをする」を支援する取り組み

(1) 対象生徒の実態

対象生徒B男は、高等部2年生で、父・母・祖父とB男の4人暮らしである。中学校は、特殊学級に在籍し、高等部より本校に入学してきた。バスと電車を乗り継いで通学しており、日常生活面では、概ね自立している。家庭では、1年時の秋から自分の部屋をもらい過ごしている。また、自分専用のパソコンを与えてもらい、インターネットの動画サイトを閲覧するのが日課となっている。性格的には優しく他人を思う気持ちがあるが、初めてのことや突発的な場面、初対面の人と話す時などに、緊張して思うように話せないところもある。そのため入学当初はやや消極的な面も見られたが、次第に学校生活にも慣れて、課外活動の陸上クラブや軽音楽クラブにも所属して頑張っている。練習に励んで校外のマラソン大会に出場したり、秋の学習発表会でベースを演奏したり、生徒会に立候補して役員をしたりと、積極的に参加しようとする姿が多くみられるようになってきた。

(2) 大目標決定の経緯

①本人の望み、願い

高等部1年時の10月に父親が富山県の高岡市へ単身赴任をすることになった。父親の引っ越しの際には、荷造りの手伝いをした。父親が単身赴任してからは、週末にはよく泊まりに行き、簡単な夕食を作って父親の帰りを待つことが多くなった。父親の一人暮らしを身近に感じながら過ごす日々が半年ほど続き、2年時の4月頃には、真剣に一人暮らしについて考えるようになった。

その頃から学級担任との日頃の会話の中で、「僕、一人暮らししたいなあ」「いいなあ、僕もやりたいなあ」とよく話すようになった。日頃の出来事などを互いに話し、B男が自分の思いを話しやすい雰囲気の中で行った面談で、今一番望んでいることについて聞いたところ、B男は「一人暮らしをしたいです」という思いを話した。

②保護者の望み

本校入学時の保護者アンケートでは、「卒業後は一般就労をして車の運転免許を取ることや、バスや電車利用して、自宅から離れた所での一人暮らしまたは寮生活を行うこと」についても思いを寄せていた。また、「B男に色々な経験を積みせたり体験させたりしたい。そして仲間や知り合いを作り、B男を多くの人に知ってもらい見守ってくれる人を増やしたい」との思いから様々な活動に家族で参加している。2年時4月のアンケートでは、「B男は自立したいという気持ちから、自ら家事を毎日手伝ってくれる。好きなのだと思う。できるできないの差があり、助言があればできることが多いと思う。一人っ子のB男に一人で生きていける力をつけて欲しい。」との願いがあった。

2年時1学期の学級担任との懇談では、一人暮らしをしたいと願うB男の希望に寄り添い、学校と協力しながら支援していく環境をともに整えていくことに同意し、B男の新しい経験を積むことによる学びに期待を寄せている。

③教師の願い

普段から会話や面談の機会を多く持ち、B男が心の内を話しやすい関係を作る中で信頼

関係をさらに築き、B男の気持ちを受け止め、励まし、心の成長を支えていきたい。

B男が自分で目標を決め、自分で決めたことによって自発的に活動の場を広げていく中で生活に必要な様々なスキルを獲得していったと願う。それらによってB男が新しい価値観をもち、B男が自分のライフステージにおける立ち位置を認識しながら成長していくことを期待している。そのために保護者との共通理解の下で協力を進め、ともに支援をしていきたい。

④大目標の決定

本人の望みを受けてB男と大目標についての面談をしたところ、B男と保護者と学級担任の思いがほぼ一致していたことから、話し合っ大目標を「一人暮らしをする」と決めた。その面談の際、一人暮らしをしたいと願うB男の思いを大切にすることや、高等部の教師や保護者に協力を仰いで、みんなでB男を応援する趣旨を伝えると、「うんうんうん、そうなんや、いいねえ～」とB男特有の表現で喜んでいた。

(3) 個別の指導計画 (紀要 91 ページ参照)

(4) 実践の経過

個別の指導計画に基づいて小目標を達成するために行った活動の経過を小目標の順に報告する。

小目標①一人暮らしに必要なことを知る

小目標①の実践では、学級担任が休み時間などにB男との個別の時間を設定し、面談を繰り返すことで学習を進めた。その内容をまとめたプリントを作成し、ファイルに綴じて整理や見返して学習ができるようにした。

大目標決定後、一人暮らしについての既有知識を把握するために行った面談において、B男は以下のことを話している。

- ・一人暮らしをする際には引っ越しをしなければならない。(B男自身、数度の経験がある)
- ・不動産会社で部屋を探さなければならない。
- ・自宅にある家具や電化製品や使い方を、ほぼ理解している。必要なものは、テレビ、冷蔵庫、電子レンジ、トースター、炊飯器、パソコン、洗濯機、ベッド、食器
- ・一人暮らしにはお金が要る。現在の小遣いは5千円。

以上のように、不動産会社で部屋を探すことや、生活に必要な家具についての知識は大まかにはあるものの、生活を維持していくことに対する知識が薄いという実態がわかった。生活費や収入、住みたい場所についての知識の必要性を感じ、以下の学習を進めることとした。

①一人暮らしに必要な費用を考える

先の懇談を受け、B男は1ヶ月の生活にはどれくらいの金額が必要であるかを知らなかったため、参考となる1ヶ月の生活費の日安(インターネットのページを参照したところ、約14万円であった)についての資料を提示した。家賃から順に解説し、B男は、生活

をするには家賃、電気、ガス、水道、食費、雑費などの経費が必要であることを知った。しかし、1万円を超える数についての概念が乏しいため、この時点ではその価値がどの位のものであるかを理解するまでには至っていないように感じた。

1ヶ月の収入を知るために行った面談では、「障害者年金」と「卒業した先輩の月給」を例にし、自分の1ヶ月の収入を算出することとした。B男は既に、成人すると「障害者年金」が受給できることを知っていたが、金額については知らず、7万円と概算した。「自分の給料」については、卒業した先輩の月給を例にしたところ、「僕はがんばって働くから、8万円にします。」と自分で決め、成人後の1ヶ月の収入は、「障害者年金」と「自分の給料」を足して15万円と設定した。なお、自分で設定した月給については、例にした先輩たちの中では高めの設定であった。

その後の面談でB男は、一人暮らしの生活費における収入と支出のバランスを自分で考え、1ヶ月の生活費を10万円前後と再設定した。節約をしなければ生活を維持できないことに思い至ったように思われる。

②一人暮らしをする所や時期を考える

「一人暮らし」をするにあたって、どういう所に住みたいかの希望を10月に学級担任が聞き取った。B男はマンションに住みたいと発言したので理由を尋ねると、お父さんが住んでいるところだからという答えであった。マンションとアパートとの違いは知っているが、家賃の違いについては知らなかった。マンションはアパートに比べ家賃が高いことや、学級担任はアパートには住んだことがあるが、マンションは家賃が高くて住んだことがない経験を参考にし、自分が一人暮らしをする場所をアパートに決めた。その後、住みたい場所や一人暮らしを始める時期について聞き取った、B男の思いについては以下の通りである。

・住みたい所について

自宅から徒歩5～10分の所、それか電車とかバスを使えるから、家から離れた所でもいい。地域は自宅のある小松、金沢、高岡がいい。けど、高岡はお父さんが単身赴任でいる間だけ。

・一人暮らしを始める時期や住む部屋について

卒業してちょっとしてから、アパートに住みたい。グループホームよりもアパートがいい。

なおこの懇談では、B男自身熟考しながら言葉を選び答えていた。またB男は、学級担任に話しながら、自分の考えを整理する作業を同時に行っているようにも感じた。B男の言葉からは、住みたい所については両親や親しい人が住んでいる所の近くを、一人暮らしを始める時期については自信がついてからという思いに及んでいることが推測できた。

12月に行った懇談では、B男は「今は自信がないけど、自信がついてから一人暮らしがしたいです。」と話した。

③大学生の一人暮らしのビデオを見る

高等部では、週に1時間職業科を実施している。職業科では、一昨年の教育実習をした学生の一人暮らしのビデオを見て一人暮らしのイメージをつかむことを目的とした授業を行った。そのビデオは、部屋の間取りの紹介から始まり、料理の買い出しから帰ってきた

所から、野菜を切ったり、煮物をしたり、炒めたり、料理をする場面、風呂の掃除、洗濯機による洗濯や干すところ、ごみを出すところという内容だった。ビデオを見て一人暮らしをしてみたいかどうか一人ずつ聞いたところ、B男は「やってみたい。理由は、僕は料理や家事ができるから」という思いを話した。B男は料理や家事に自信をもっている様子で強い意思が現れていた。

小目標②家事（炊飯、簡単な調理、買い物、洗濯）ができるようになる

①授業での取り組み

ア. 衣食住の学習

高等部では、家庭科を週に1時間実施している。日常生活（主に衣食住）における知識や技能を身につけることを目的として授業で行ったことは以下の通りである。

- ・アイロンがけ
- ・身だしなみ
- ・レトルト食品などを使った簡単な調理
- ・ピザトースト、卵焼き
- ・炊飯当番（栄養教諭から給食の米を貰って当番が炊く）

B男は、やる気や興味がとてもあり、衣食住についての学習を繰り返し行うことで上達が見られた。また、授業で学んだことを自宅でもすぐに実践するなど、意欲的であった。



調理器具を洗っているB男

イ. クラス合宿での買い物

本校では、生活訓練棟でのクラス合宿を年1回行っている。高等部では、合宿の日程や夕食の献立、必要となる食材を購入するなどの計画を立て、合宿をクラスごとに実施している。その際に、スーパーマーケットでの買い物をクラス全員で行った。帰校後、食材の不足に気付く、立候補したB男が再び一人で買い物に行くことになった。買い物に行った直後ということもあり、B男は臆することなく、一人で買い物をする事ができた。また、そのことに満足している様子や自信たっぷりの話しぶりから、「一人で買い物ができる」という自信につながったと思われる。

②家庭での取り組み

高等部2年に進級した当初の母親との懇談で、家事の手伝いをする経験が少ないことがわかり、家事全般で手伝いができる環境を整えてもらうようお願いした。その後、母親の協力の下、以下のことについて自分でできることが日増しに増えている状況である。

- ・洗濯、干す、たたむ（帰宅後自分や家族の衣類を洗濯している）
- ・料理（休日は母親と一緒に夕食のメニューを考え、買い物をし、料理をしている）
- ・部屋や風呂の掃除
- ・布団のシーツ換え（1年後期のホテルでの現場実習時に経験した）

2年時9月の聞き取りでは、料理以外の家事については一人で行うことができるという思いがあり、母親も大まかではあるが認めている。この時点からB男は、一人暮らしに向けて料理を覚えることを頑張り始めた。元々食事や食材に興味があるB男であったが、2年

時 12 月現在の聞き取りでは、一人で作ることができる料理は 7 種類、支援があれば作れる料理が 3 種類、あと数回支援を受けながら作れば自分で作れそうな料理は 3 種類、今後作ってみたい料理は 5 種類に増えていた。そのことが普段の会話の中にもよく話題に上がり、料理を新たに覚えることに楽しみを感じているようである。またそこには、自分で作った料理や、母親の支援を受けて作った料理が家族に喜ばれており、できたうれしさや家族の役に立っているという思いが次への意欲につながっていることが窺い知れる。

小目標③金銭や物の価値を知る

①授業での取り組み

ア. ファーストフード店で飲食をする

生活単元学習の授業において、金銭を実際に使って予算や支払い方法などを知ることや余暇の活動を広げることを目的として、ドーナツショップでの購入と飲食の学習を行った。自分でドーナツと飲み物を選びレジで支払いをする経験を、同じ系列の別の店で 3 回行った。

後日 B 男は、学級担任の勧めもあり、ドーナツショップでの購入や飲食を行った経験から、形態が同じであるハンバーガーショップへ一人で行き、買い物をすることができた。欲しい商品を選び飲食の前に先にレジで支払いを済ませる同形態のファーストフード店では、今後も一人で購入や飲食ができるという自信がついた、と学級担任に話している。



ドーナツショップで飲食中の B 男

なお B 男は、ハンバーガーショップで食欲を満たすには 800 円程度必要であるという金銭感覚を得ている。

イ. ウィンドショッピングをする

12 月に、欲しいものの値段を知るために、駅前のビル内にあるファッションフロアを見て回った。沢山の洋服やバッグの中から好みに合うバッグを選ぶと 9800 円であった。この金額について高いか安いと思うか聞いてみると、B 男の反応は「高いね」であり、9800 円は高いと思っていることがわかった。今後は、「小遣いや給料がいくら」を基準にして、それが「自分にとって必要か」、「どれくらい欲しいか」などを考えながら買えるように、新たな学習や経験が必要になると考える。

②家庭での取り組み

保護者との面談の際に、学校では実践が難しい金銭に関わる経験を沢山させて欲しいとの旨を伝え、家庭で以下の取り組みが行われた。

ア. 古本を売る

自宅にある本を、古書店に持って行き売る経験をした。多くの本を持って行っただが、貰えた額はわずかだと感じたようである。

イ. 自分の口座を作り預金や引き出しをする

母親の支援を受けて、郵便局で自分の口座を作った。自分の口座に入金することや、現

金を引き出す経験をした。また、残った小遣いを口座に入金し、貯まっていくことがうれしいとB男は話している。

ウ．支払いをする

グループホームの支払いを自分で行った。4回の利用で9千円程度であった。

小目標④親元を離れて暮らす経験をする

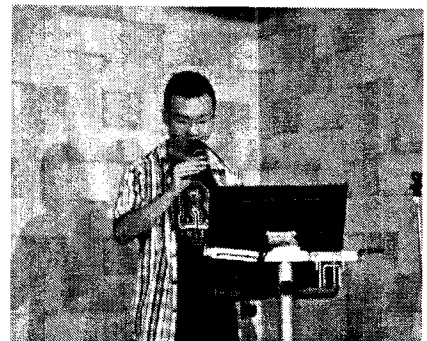
一人暮らしをする前に、何らかの経験を積ませたいという母親の願いを受け、グループホームの運営に携わっている本校教頭と母親の懇談を設けた。母親から話を聞いたB男本人は、グループホームでのショートステイにとても前向きで、2年時の夏から、B男の思いを大切に考える家族の協力を得て、週1回グループホームに宿泊する経験を続けている。また、グループホームに通う日には、同時に近くにある少林寺拳法の道場にも通い始めた。宿泊は平日なので、学校からグループホームへ、翌日はグループホームから学校へ、バスと電車を乗り継いで通学している。自宅とは異なる緊張感が始めはあったようだが、温かく迎えてもらい、周りの大人の利用者の方々と過ごすごとに段々と慣れていった様子であった。グループホームに通い始めて1～2か月は、グループホームや少林寺拳法の出来事を自分から話すB男であったが、10月辺りからは自分から出来事をほとんど話さないようになった。B男から話を聞くと、道場に通っているためグループホームでの滞在時間が短く、利用者と話をする時間があまりないとのことであった。大人と話すことが好きなB男にとって、グループホームは少し楽しさもあるけれど、好きでも嫌いでもないとの思いであった。少林寺拳法の道場では年配の方々から可愛がってもらい、通うことを続けたいという思いをもっている。また、「グループホームよりもやっぱり一人暮らしがいい」との思いも同時に打ち明けていることから、グループホームを体験してみたが、自分の願いには合っていないとの思いがB男にはあるように推測できた。

小目標⑤余暇の過ごし方を覚える

①自分たちで連絡を取り合いカラオケに行く

B男は「ほんもの学習」※のカラオケグループとして、カラオケに出掛け支払いを自分で行った経験がある。「ほんもの学習」を経験した後、B男は友だちを誘って自分たちでカラオケに行きたいと、度々話すようになった。そこで友だちの誘い方や待ち合わせの方法、所持金についての支援を行ったところ、B男は夏休み中に先輩や後輩を誘い、自分たちでカラオケに出掛けることができた。自分だけでは多少の不安があることから、既に自分たちだけでカラオケや映画に行ったことがある先輩を誘うことで、カラオケに自分たちで行くことができた。この経験を経て、自分たちで行けるという思いが強くなってきたように感じる。また、カラオケに行く際の連絡を取るため、電話番号やメールアドレスの交換を行ったことをきっかけとし、その後も一緒にカラオケに行った先輩や後輩とメールのやり取りを続けている。

なお、B男は学級担任と1年時5月からの約1年半の期間で、メールのやり取りを50回程度重ねており、内容はその日の出来事や個人的に聞きたいこと、時には不安に思っ



ていることへの解答を求めるものや諸大会に出場する前の意気込みが多く、その時々 of B 男の気持ちを伝える内容であった。

※「ほんもの学習」…生徒の現在及び卒業後の余暇生活を想定した実体験重視型の学習であり、本校高等部の総合的な学習の時間に位置づけて行っている学習活動である。年 2 回行い、事前・事後学習を含め計 20 時間を設定している。

②家族での趣味

B 男は休日に、両親と一緒にマラソンや自転車、スノーボードなどの大会に頻繁に出場し、そのための練習を数多く行っている。B 男の両親は、一人っ子である彼を見守ってくれる仲間や知り合いを増やしたいとの思いから、いろいろな活動に積極的に取り組んできた経緯があり、仲間や声をかけてくれる人が増えてきている。

B 男の思いとしては、スノーボードは得意としているが、マラソンについては走ることがあまり好きではないが、仲間が応援してくれることや頑張った後の充実感が心地良く、走ることを続ける原動力になっている、という思いを 1 年時の 12 月に行われた「私のメッセージ（校内の弁論大会）」で発表した。それまでの B 男は、両親の勧めるままを受け入れ、意思表示をなかなかできなかったが、「自分は走るのはあまり好きではない」という本音を両親に打ち明ける大きな転機となった。その後 B 男は、自分の気持ちや意思表示を積極的にするようになってきた。

5. まとめと考察（生活機能モデル 紀要 92 ページ参照）

事例 2 は、B 男の「一人暮らしをする」という望みを学校や保護者が支えながら、それに向かって日々の学習活動に取り組んだ事例である。

高等部の教師や保護者は、入学当初の B 男について、自分の本音を表現することに困難さがあると感じていた。そこで、教師は、面談や聞き取りの機会を多く設け、B 男の気持ちを引き出すことを大切にしてきた。また、保護者と連絡を取りながら B 男の「やる気」を後押しすることを大切にしてきた。その結果、B 男は自分の本音を少しずつではあるが、自分の言葉で学級担任や保護者に伝えるようになってきた。また「自分を応援してくれている学校や家族がいる」という安心感の中で、B 男は目標に向かって次にやりたいことを自ら探して行うなど、活動に意欲的に取り組んでいるように感じる。

生活機能モデルにおける家事等の活動や参加が増えたことからわかるように、少しの支援を受けながら様々な活動を繰り返すうちに、支援を受けずに一人でできるようになった活動が増えてきた。今まで興味はあったが、実現する手段を知ったことで、潜在的に所持していたのであろう能力を発揮する機会が得られたようにも感じる。

現段階においては、B 男は「一人暮らしをしたい」という思いから、より現実的な「自信がついてから一人暮らしをしよう」という、今の自分から見た思いに変わった内面の成長を評価したい。

また、本取り組みにおいて、家庭との協力の重要性を強く感じた。B 男のやりたいことやそのために必要な実践を支える場面設定の多くを、家庭の協力で得ることができたことを特筆したい。

高等部	2 年
氏 名	B 男

後 期	個別の指導計画
-----	---------

大 目 標 : 一 人 暮 ら し を す る

小目標

- ① 一人暮らしに必要なことを知る
- ② 家事(炊飯、簡単な調理、買い物、洗濯、掃除)ができるようになる
- ③ 金銭や物の価値を知る
- ④ 親元を離れて暮らす経験をする
- ⑤ 余暇の過ごし方を覚える

小目標に対する実態

- ① 一人暮らしに必要なことについて関心がある
- ② 炊飯や洗濯、簡単な調理などの家事がほぼ自分でできる。新しい料理を覚えることに意欲的である。
- ③ 高等部入学後小遣いを使い、下校時にジュースなどを購入。スーパーマーケットでの買い物や、ファーストフード店で購入の経験がある。
- ④ 週1回グループホームへ宿泊し始めた。
- ⑤ 両親とロードバイクやマラソン、スノーボードの大会に参加している。先輩とカラオケに出かけたことがある。少林寺拳法の道場に通い始めた。

小目標を達成するために何をするか(具体的な内容)

- ① 一人暮らしに必要な費用や時期を考える
大学生の一人暮らしのビデオを見る
- ② 授業での取り組み(衣食住の学習、クラス合宿での買い物)
家庭での取り組み(炊飯、簡単な調理、買い物、洗濯、掃除)
- ③ 授業での取り組み(ファーストフード店で飲食をする、ウインドショッピングをする)
家庭での取り組み(古本を売る、預金や引き出しをする、支払いをする、予算内で買い物をする)
- ④ グループホームが自分に合っているかを考える
- ⑤ 少林寺拳法を続ける
自分たちで連絡を取り合いカラオケや映画に行く

小目標に対応する教科・領域等

教科・領域等	※	目 標	学習内容・手だて	様子・評価・次の目標等
家庭	① ③ ⑤	自立した生活に必要な事柄を学ぶ	衣服の着こなしを見せ合い、みんなの意見を聞く。 一人で簡単な調理をする。	
生活単元学習	③	自分で買い物をする 欲しいものの値段を知る	ファーストフード店で購入と飲食の経験をする。 ウインドショッピングをして欲しいものの値段を知る。	
職業	①	一人暮らしのイメージをつかむ	一人暮らしをしている大学生のビデオを見て、生活のイメージをつかむ。	
情報	⑤	インターネットを活用して情報を得る	検索サイトの使い方を学び、知りたい情報を得る。	

大目標に照らし合わせた評価(子どもの内面の成長とそこでの教師の役割も併せて記入する)

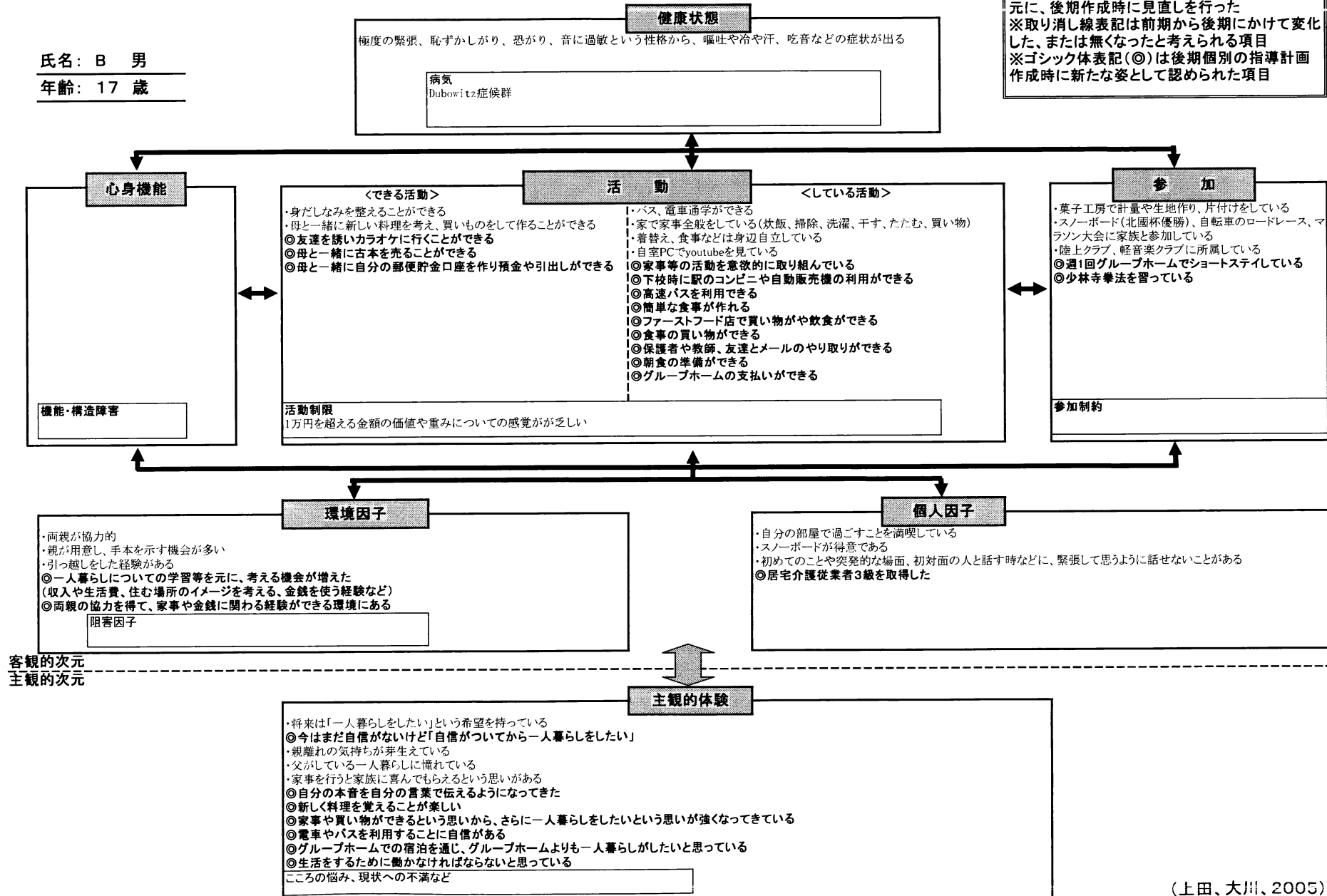
次の大目標または今後の授業での取り組み

大目標「一人暮らしをする」についての生活機能モデル

氏名: B 男

年齢: 17 歳

※前期個別の指導計画作成時に作成したものを元に、後期作成時に見直しを行った
 ※取り消し線表記は前期から後期にかけて変化した、または無くなったと考えられる項目
 ※ゴシック体表記(◎)は後期個別の指導計画作成時に新たな姿として認められた項目



(上田、大川、2005)

4. 事例3 C男の「卒業後の生活を考える」ことを支援する取り組み

(1) 対象生徒の実態

高等部3年のC男は、研究初年度から継続して3年間事例対象生徒である。まず、C男についての入学時からの様子を記す。

【1年時の様子】

中学校では通常学級に在学し、本校入学を希望するに当たって保護者がC男に彼の障害を「カミングアウトした」そうである。入学当初は、「休みの日に、中学校の友だちとカラオケに行った」と、実際とは違う話をするがあった。また、将来の希望については「免許を取りたい。けど親は無理だと言った。」「整備士になりたかったけど、専門学校や大学に進学できないから無理だと言われた。」と周囲から言われたことに対して自ら限界を設け、自信もないようだった。

初めての現場実習の際の事前の希望調査では、「自分の好きな車関係の仕事をしたい」と述べた。ここで、研究のテーマにそってC男の「将来車関係の仕事をしたい」という思いを支援する取り組みを行うことにした。C男の気持ちに添うべく、進路担当者を中心に車関係の実習先を探したが受け入れ先が見つからなかった。自分だけ実習先が見つからないことで不安になっている本人とともにハローワークに出向いたこともあったが、実を結ばなかった。これらの一連の体験でC男は「車関係の仕事にこだわらない。自分にあった仕事を見つけない。」と自らの希望を修正し、5つの実習可能な企業や作業所の中から電気基盤の組み立ての仕事を選び、実習を行うことができた。



基盤を組み立てるC男

【2年時の様子】

このころ自動車産業の不調が報じられていた。また、若者の農業回帰のテレビ番組に影響を受けたり祖母の野菜作りなどを見たりして、「農業はもうかる。農業関係の仕事をやりたい。車もいいけど」と言うC男に対して、「自分にあった仕事を見つける」という大目標を継続することとした。作業学習では菜園工房に属し、前期後期とも現場実習は農業関係の会社や機関で行った。根気や体力を要求される実習であったが、教師も保護者も感心するほどC男はよく頑張っていた。また、保護者の許可を得て家庭菜園を始めたり、教師から自治体の実施している農業体験の情報を伝えられるとそれに参加していた。農業に関する活動の場を学校以外にも求めたり、自ら作ったりする自発的な姿を見ることができた。



きゅうりを収穫するC男

8月に居宅介護事業従事者3級の資格を取るため石川県社会福祉協議会が主催する研修会に参加した。

前年度先輩が研修をしていたのを見て「資格を取りたい」と参加したものである。実習も含めての研修の後、「(ヘルパーの仕事は)いいわ(向いていない)」と自分で判断していた。

余暇活動では、「ほんもの学習」で公共交通機関や施設を自分で調べるスキルを獲得し、実際にカラオケやボウリングに行った経験を活かして、友だちを誘って休日に遊びに行き始めるようになった。また、クラブ活動では「軽音楽クラブ」に入りギターの練習を始めた。

【3年時前期の様子】

3年でも作業学習は菜園工房に所属した。ハローワークや発達支援センターの方々を招いての就労支援会議の場で「農業関係の仕事に就きたい」と表明した。その後T社から就労につながる実習受け入れの話があり会社を見学した。T社は織機を作る会社で実習での仕事内容は古い図面をスキャナーに取り込む電子化の仕事であったが、秋以降は水耕栽培の事業を始める予定がありそこでの実習も可能性があることなどの説明を受け、実習に行くことに決めた。実習期間に他の支援学校から来ている実習生達とも仲良くなり、休みの日には誘って遊びに行くなど新しい友だちとつながっていく姿が見られた。水耕栽培の見通しが立たないままではあったが、8月上旬には「T社で働きたい」旨を伝えてきた。「農業はどうするの?」と聞くと「趣味でいいです。」と答えた。また、自治体の農業体験を継続していることも改めて知ることができた。



ノズルの組み立てをするC男

(2) 大目標決定の経緯

①本人の望み、願い

1年時から3年時初めまで、「自分にあった仕事を見つける」という目標を設定しそれが達成できたことから、将来何をやってみたいかを本人と話し合ったところ、

- ・ 異性と仲良くなりたい
- ・ 車の免許を取りたい
- ・ 東京ドームや甲子園などへ行ってプロ野球を見てみたい
- ・ 働いて給料をもらいパソコンやギターなどを買いたい

と、話した。

②保護者の望み、願い

保護者からは、1年時には進路に関して「何が出来るのか、何に向いているのかいろいろな可能性を見てほしい。ぜひ就職して欲しい。」という願いが出ていた。2年時には「菜園(作業学習)が楽しそうで、今は農業に関心が向いている」としつつも、「適性についての助言が欲しい」「関心の持てる作業を見つけないか」という願いがあった。3年時でも「一般就労させたい」という願いからT社での実習を希望された。

③教師の願い

C男の希望を反映しながら実習先を選択する機会を設けてきた。自分の適性に合った職業を見つけることができ、今後は将来のライフスタイルをイメージし、社会人として必要なことを学んでほしいと願っている。

④大目標の決定

C男の願いを受け止めながら、いろいろな活動を支援したり体験を通してC男自信が知識を更新する中で、1年時や2年時の願いとは違うがより現実的な進路を自分で「これでいい」と決めることができたと思われる。また、進路だけでなく、友人関係や余暇活動についても広がりを見せてきた。そこで3年後期の大目標として「卒業後の生活を考える」とした。

(3) 個別の指導計画(紀要99ページ参照)

(4) 実践の経過

小目標達成のために行った活動の内容及び経過を順に報告する。

小目標①一人暮らしに必要なことを知る

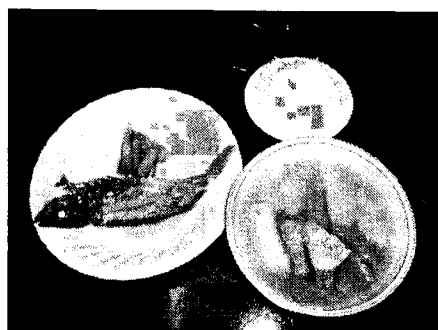
家庭科の授業では、ご飯の炊き方や電子レンジを使うなどの簡単な調理を行っている。調理の献立についても主食、主菜、副菜など栄養面から学習し、調理を行なっている。将来一人暮らしをしたいと思っているC男は、グループホームに興味を持っていた。そこで、本校に隣接する日常生活訓練施設「すずかけの家」を利用し一人暮らしの模擬体験をした。



クラスメートと合宿で一緒に泊まったりしたことはあるが、教師が引率するとは言え一人で自炊し宿泊するのは初めてである。初めての体験は不安より楽しみの方が優先し、3日間に必要な物や食事メニュー・材料などは保護者と相談しながら考えてきた。授業が終わってからC男一人で買い物をして来た。

食事のメニューは次の通りである。

- ・ 1日目夕食(煮魚、ポトフ、ご飯)
- ・ 2日目朝食(ポトフ、ご飯)
- ・ 2日目夕食(水炊き、ご飯)
- ・ 3日目朝食(味噌汁、納豆、ご飯)



1日目の夕食

[C 男の感想]

11月17日～19日（2泊3日）泊まりました。しあわせの湯にあって財布をなくしました。カウンターにいったらあったのでよかったです。今度からは貴重品はロッカーの中を確認して鍵をしめます。

楽しかったことは鍋をしたことです。みんなで食べたらいしかったです。あと銭湯めぐりが楽しかったです。

ポトフを作る時にキャベツを入れるのを忘れていたのですがうまかったです。

学んだことは味噌汁を作った時に豆腐を茹でずに入れたので次からは火に通してから入れます。

僕は※すずかけで子供と遊んでいたらボランティアをしてみたくくなりました。今度自分一人でアパートを借りて暮らしたいです。

※すずかけ：障害児学童保育の名称

もともと料理をすることが好きだったC男だが、一人暮らしの模擬体験ではみそ汁の具材を入れる順番やメニューに応じた野菜の切り方があることなども知ることができた。

小目標②趣味を広げる

①音楽を広げる

C男は音楽に興味をもっており、好きな音楽のCDを購入したり、インターネットで聴いたりレンタルショップで借りたりし楽しんでいる。音楽の授業では、積極的に歌ったり、演奏したい楽器を休み時間に弾いたりし、関心がある。放課後の活動では、週1回のクラブを通して、教員よりギターコードを習い練習している。プロの指導者にギターを習うとお金がかかるので、C男自身で曲を聴きながらギターの練習をしているのが現状である。そこで、卒業後は、学校以外で交流できる音楽サークルを探している。現在は、放課後のクラブに於いて、大学で音楽を専攻している学生にも教えに来てもらい交流の輪を広げている。就労先でもサークル活動があるのではないかと考えている。



②農業を広げる

卒業後も農業に関わっていきたいと考えているC男は、作業学習で農作業の菜園工房に所属している。校外での活動は、作業学習の時間に農家で農業体験をしている。そこでは、実際の収穫にも携わっている。また、家庭菜園をしたり県主催の農業体験に保護者と参加したりしている。学校内外の活動をとおして、卒業後も今までの経験を活かし、農作業に触れていけるのではないかと考えている。



小目標③余暇の楽しみ方を知る

①イベントに参加する

高等部の行事として、金沢大学祭 1 日目に高等部全員で参加し、本校の作業学習で作ったクッキーの販売を行った。翌日は、友だちを誘って一緒に自動車クラブや軽音楽クラブのイベントを見学に行っている。

〔C 男の感想〕

楽しかったことは理工学部の実験をしたことと自動車クラブのドリフトショーを見たことです。金大祭でクッキーが全部売れてよかったです。2 日目は友達と二人で行きました。自転車で坂を上がるのが大変でした。帰りは楽でした。また行きたいです。

また、音楽の授業などで交流のある学生のコンサートを紹介すると、保護者と見に行きたいと言い、一緒にコンサートへ出かけた。今後も、地域のサークル活動やイベントに参加することを勧めている。

① 友だちとの交流

本校では生徒自身が企画しグループ毎に活動する「ほんもの学習」があり、カラオケコース・アイススケートコース・映画コースなどをC 男は経験している。その経験を活かして休日は友だちを誘って、カラオケや映画に行ったりしている。

また、現場実習先で知り合った生徒と、休日に一緒に映画を見て食事をしたりしている。友だちとの話の中で、車に興味があることを話すと、友達は車の免許を取得していることが分かり、諦めていた免許の夢をまた、親に話す自信をもった。

学校以外の友だちとの輪を広げることで、自分の可能性を改めて確認することにもなっている。



小目標④ビジネスマナーを知る

進路担当者に「仕事をするにあたっての心構え」と礼儀やあいさつなどの指導もしてもらう予定である。

5 まとめと考察（生活機能モデル 紀要 100 ページ参照）

この3年間のC 男の研究を通して、考え方や思いが教師や保護者や友だちの影響を受けながら徐々に変化していったことが理解できる。このことは、C 男の行動や話の内容からも理解できた。

- ・ グループホームの模擬体験を行った時に、学童保育で本校の宿泊訓練棟を使用している子どもたちとボランティアの方との関わりを見て 「ボランティアをしてみたいくなりました。」と話した。

- ・ 陸上部の部長として、全体をまとめるような声かけをし、活動を引っ張っていった。
- ・ 来年のフットベースボールの大会に向けて、3年の主力が抜けた後の話を教員がC男にすると、自分から後輩を誘いに行き、また昼休みにゲームをすることが増えた。
- ・ 保護者に「車の免許を取りたい」と話した。
- ・ 1年時の作業学習で行ったことを3年時の作業学習でも一度だけ同じように行った。その様子を見比べた教員から、「受け答えや作業内容、周囲への配慮がずいぶん変わった。」と、報告を受けた。

以上から、今までの自己中心的な考えから、卒業を迎える3年時には、自分を取り巻く環境や周囲の人々の思いまでを汲み取り、社会人としてあるべき姿を自分で更新していく姿がうかがえた。

現場実習を通じては、C男が実習した部品が製品の大きな機械を作りあげる大事な一部となっていることを実感した。また、T社の管理職の方から、仕事に対しての厳しさを話してもらい社会人としての責任を知ることができた。C男自身、T社の大事な責任を負うことを自覚するとともに、この企業で今後頑張りたいと思う気持ちが高まってきた。

また、好きな車に関しては、T社でいっしょに働く実習生が自動車免許取得をしていることで、保護者と話し合いを持ちC男が免許を取得することを許可してもらった。その背景には、2年時までは、保護者の心配が大きく「自動車免許を取得するのは無理。」と、取得を考えることもなかった。3年時になり、先生方や祖父母から免許取得を言われ、C男自身は「隠れてでも取りたい。」と、話すようになり保護者も「取らせないのはかわいそうだ」と思うようになった。その上、現場実習生の保護者とC男の保護者が話す機会があり、保護者自身の考え方に変化があったことも大事な要因となった。

以上から3年時のC男の様子を保護者は、「積極的になった。場に応じた楽しみ方ができるようになった。」と、評価している。

3年間の取り組みでは、C男が「やってみたい」と言ったり、興味を示したりした方面に活動を広げるよう配慮し、複数の体験を積み重ねてきたことによって彼の生活に対する知識が更新された。さらに学校でのC男の学習態度に積極性が現れ、学校以外の色々な場面でも彼自身の活動性が向上した。

このように、C男にとってこれまでの積み重ねてきた体験は、この先の生活のあらゆる場面で活かされることになっていくと考えられる。

大目標： 卒業後の生活を考える

小目標

- ①一人暮らしに必要なことを知る
- ②趣味を広げる
- ③余暇の楽しみ方を知る
- ④ビジネスマナーを知る

小目標に対する実態

- ①グループホームに興味を持っている
- ②家でギターの練習をしている
家庭菜園をしている
- ③友達とカラオケや映画に行っている
- ④身だしなみを意識している

小目標を達成するために何をするか(具体的な内容)

- ①グループホームを体験する
- ②ギターを習う
自治体主催の農業体験に参加する
- ③各種サークル(イベント)活動に参加する
- ④スーツの着こなしや礼儀・あいさつの指導を受ける

小目標に対応する教科・領域等

教科・領域等	※	目 標	学習内容・手だて	様子・評価・次の目標等
数 学	①	生活に密着した数について学ぶ	・2桁×2桁の暗算 ・水のかさ ・多い数 ・身近なものの単位	
職 業	④	よい社会人になるための知識を身につける	ビジネスマナー	
情 報	② ③	インターネットを活用して情報を得る	・USBメモリーの使い方 ・Web検索エンジンの使い方 ・データ処理練習問題	
学 習 活 動	②	作業内容から必要な道具を想定し、準備する	・野菜の栽培(小麦、ニンジン、大根、里芋など)	
趣 味 活 動	③	好きな歌を選んで歌う	・カラオケ ・DVDやマイクの準備や片づけ	
学 生 活 動	①	一人暮らしに必要なことを知る	炊事、洗濯の仕方を知る	
家 庭	① ②	よりよい社会生活をするための基礎作り	・身だしなみ ・簡単調理 ・男女交際	

大目標に照らし合わせた評価(子どもの内面の成長とそこでの教師の役割も併せて記入する)

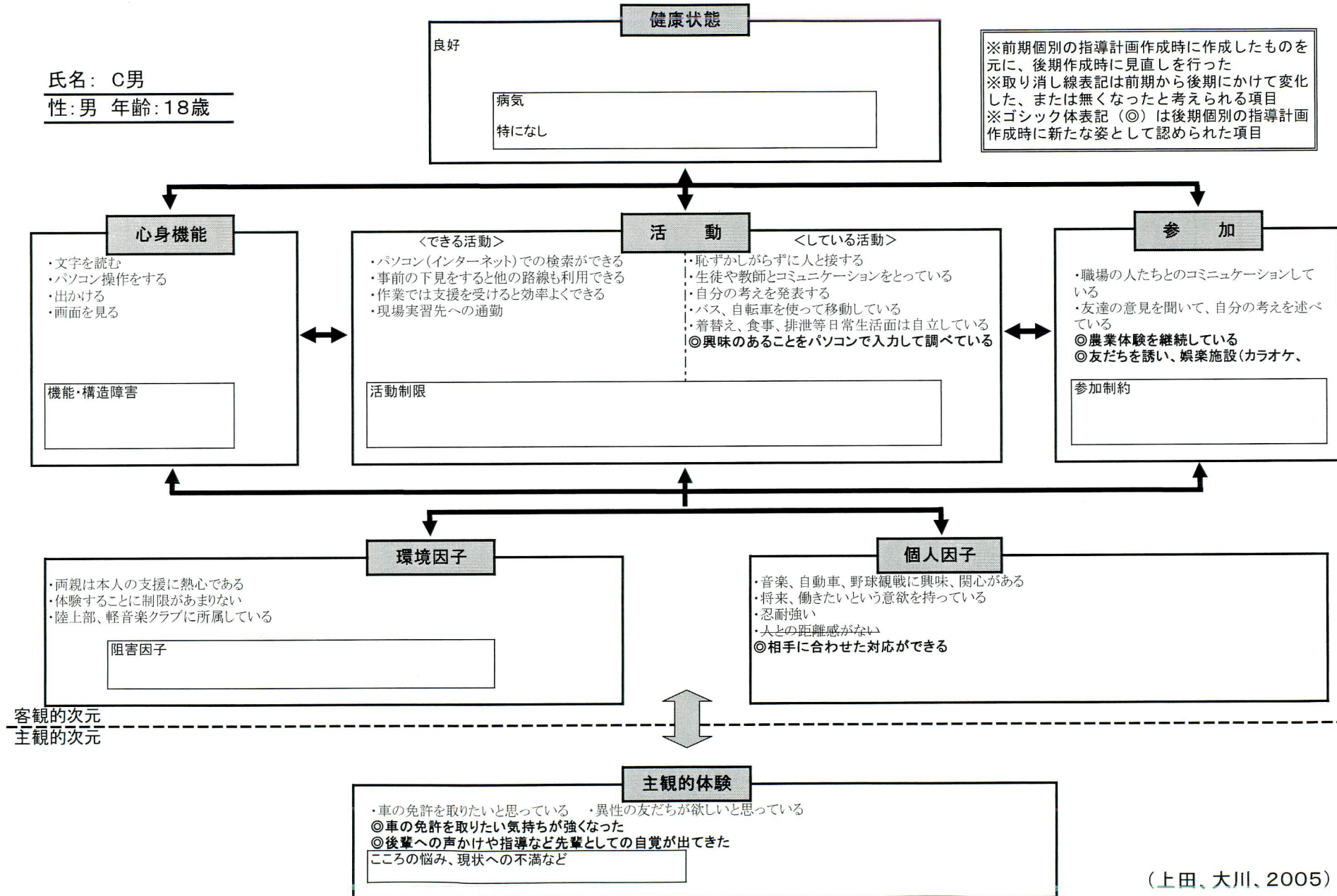
次の大目標または今後の授業での取り組み

大目標「卒業後の生活を考える」についての生活機能モデル

氏名: C男

性: 男 年齢: 18歳

※前期個別の指導計画作成時に作成したものを元に、後期作成時に見直しを行った
 ※取り消し線表記は前期から後期にかけて変化した、または無くなったと考えられる項目
 ※ゴシック体表記 (◎) は後期個別の指導計画作成時に新たな姿として認められた項目



(上田、大川、2005)

5. まとめ

高等部では、教師が生徒の「やりたいこと」や「なりたい自分」に寄り添いその内面世界に働きかけていくことで、生徒が自身の既有知識や自己認識を更新拡大し、より自主的に学習や生活に取り組むようになるのではないかと考えた。同時に、日々の学習や友だちとの関係の中で新しい知識や価値観を得て本人の視野が広がり「やりたい、なりたい」も変化するのではないかと考えて研究に取り組んできた。以下に今までの実践の視点をまとめた。

(1) 目標設定のために

①生徒と本人の「やりたい、なりたい」についていろいろな機会を捉えて話をする

生徒が話す「やりたい、なりたい」は、そのまま「ニーズ」や「目標」として捉えられるわけではない。生徒自身の思っていることが的確に表現できていない場合も多く、情報不足からその時の自分が認識できる中での一番の望みを言うこともある。機会を見つけて話しあったり雑談をしたりすることを繰り返す中で、生徒が言っていることの奥にある本当の思いを探る事ができるのではないかと考えた。

②保護者の願い

毎年4月初めに、個別の指導計画作成に関するアンケートを行っている。そこでは生徒の「現在の様子」と「本人の希望」を記入した上で「保護者の願い」を書いてもらうようにした。保護者からは、生徒のできないことを目標にして欲しいという記述は少なくないが、それは大きな関心事であろう。その気持ちをくみつつ、本人の気持ちと重なる部分を目標として取り上げるようにしてきた。

③教師の問題意識

大目標は学校教育目標でもあり、教師の視点からの検討も必要である。その際には従来私たちが行いがちであった、生徒のできる・できないだけに重点を置いた目標設定にならないようにしたい。生徒との話し合いに関して教師は否定や価値判断をせず、本人の気持ちにそって話をする事が大切である。ともすれば教師が気を利かせて本人の言葉をまとめがちであるが、それも極力控えて本人が自分の言葉で話す機会を増やしたい。結果的に教師の問題意識に関連した目標になったりしても、本人が納得したり同意したりしていれば、一方的な押しつけにはならないと考えた。

④目標の共有化

それぞれの思いや願いや問題意識を検討して目標を決定したら、可能な限り本人と目標を共有したい。懇談で個別の指導計画を保護者に提示する時に生徒も同席することが望ましく、自分の目標とそれに関する学習内容を聞くことで学習の主体や当事者が自分であることを少しでも意識してほしいと考えた。

(2) 目標を達成するために

今まで私たちは生徒の「できない」こと、つまり能力の不十分な部分に注目してその目標を立ててきた。従来の目標設定では、それが「できた」か「できなかった」かが評価となる。今回の研究で、生徒の「やりたい、なりたい」を目標としたことで、生徒への支援や評価の視点も変化した。できなかったことができるようになることも大切なことだが、本人の内面世界に目を向けて働きかけることで、生徒がどのように成長したかも評価の視点とした。

①内面世界に目を向ける

【既有知識】

まず、生徒が自分の「やりたい、なりたい」ことに関してどのような知識をもっているか教師が把握することが必要である。生徒の願いについて聞き取りを始めていくと、その根拠が思いこみであったり偏った情報であったり狭い知識から語られることも少なくない。生徒の既有知識を把握した上で、それをより正しい知識へと更新することが大切である。

高1のA男の事例では、本校の中学部から高等部への進学者だったので、試験はなく面接のみであった。そのためA男には高校受験についての知識がなく「面接をしたら附属高校に行ける」と思っていた。

【自己認識】

既有知識を更新すると同時に、生徒自身が「やりたい、なりたい」ことに対する現在の等身大の自分の姿を認識することが必要である。正しく自己認識ができるようになってくると、目標に対してすべき事が具体的になり、教師の支援や助言も積極的に受け入れられるようになる。また、目標の実現が困難だと思った場合は、周囲からの「無理だ」という声からではなく、自身で自分の希望や方向性を修正し始める。自分で納得して自分の希望を変えることは妥協ではなく、内面世界が広がる事であり本人が成長した事であると捉えている。

事例のA男は「僕は附属高校に行ける」と思っていたが、石川県公立高校入試問題に取り組んだことで、今の自分の学力がまだまだ不十分であったことが理解できたようだった。この後「10年ぐらい頑張れば附属高校に入れる」に変わった。

【自己効力感】

目標に対してすべき事が具体的になり、教師の支援や助言も積極的に受け入れられるようになると、「自分でもやれそうだ」と予測できる課題に対しては、生徒自身が取り組み始め活動性が向上する。反対に具体的な課題に対して「自分には難しい」と思われた時や困難な状況が見込まれる場合は、課題に取り組めなくなったり自分の望みの方向を修正したりする姿も見られた。

休み時間に小学校のドリルに取り組んでいたA男だが、高校入試問題を受けた後では友たちとのドッジボールに加わり楽しんでいる姿が増えてきた。高校に入学するためにはまだまだ膨大な学習が必要であることを知って、具体的に何をすればよいか分からなくなっているようにも見えた。「僕は頑張ればできる」という思いをもっているA男だが、その思いを大切にしながらも、自分の好きなことや向いていること、できている部分を活かしていくことに目を向け始めてもよいのではないかと考える。

以上を内面世界に目を向けるときの視点としたが、これらは順番にではなく互いに関連しあったり補いあったりしながら作用すると考える。内面世界に働きかけていく事は生徒自身が選んだり決めたりできるようになることを支援することだと捉えることができる。

②教師の支援

【ズレの是正】

生徒の既有知識や自己認識と現実にはズレがあることが多い。時として現実と大きく乖離した「なりたい」ことが生徒の口から話されることもある。その「なりたい」に対して、正しい知識やイメージを伝える学習や活動を組み立てていきたい。それは本人に「やりた

い、なりたい」ことをあきらめさせるためにする支援ではなく、「なりたい自分」を実現させる際に必要な知識を伝え、今の自分と照らし合わせていくことができるようにするために行う支援であるべきである。

【本人が達成できる具体的な活動の提示】

目標を達成するときには、生徒自身ができる具体的な活動を提示することが必要である。個別の指導計画にあるとおり、私たちは「大目標」を達成するためのより具体的な小目標を考え、生徒の実態と照らし合わせながら目標に関わる教科について学習内容と手だてを考えた。活動については生徒自身が活発に取り組むものとそうでないものがあったが、課題自体が生徒にとって難しそうな場合はスモールステップにし直したりすることもあった。自分の必要性や自己効力感によって活動を選んでいると思われた場合は、取り組まない活動に対してはこだわらず、次の別の活動を提示するようにした。

また、活動によっては校内で設定するのは難しいものもあり、関連するイベントなどの情報や他機関につなげるなどの支援も行った。

【共感を持って本人に問い直す姿勢】

大目標が決まった後も、生徒とは何回も機会を見つけて話し合った。「世間は、現実はこのいうものなのだ」と言って聞かせるのは簡単であるが、教師だけが指導した気になって生徒には何も伝わっていなかったことは往々にしてある。教師が根気よく、生徒に自分の願いについて問い直すことは、自分に向き合わせることであると考える。本人の願いを軸にして「どうしてそう思うのか」「あなたができることは何か」「今したいことは何か」「優先順位は何か」を本人に問い直していく作業をすることで、次の活動を組み立てることができたと思う。「10年後にはなりたいものになれる」と答えたA男に対しては、そのために今年1年、この1ヶ月に何をしなければならぬかを自ら計画させることが、再度自分と現実に向かい合わせることになると思われた。

また、願いが真剣であればあるほど本人が壁にぶち当たり困るときがある。その時に教師が本人の困り感に共感し、その問題を解決するために共に動くと、生徒自身がより現実と向きあい大きく内面世界を更新する姿が見られた。

【新しい知識やイメージなどの提示】

高校生の段階ではまだまだ経験は少なく、知識の範囲も限られたものであることが多い。現実と生徒の気持ちのズレを埋めていく支援と同時に、高等部の教育課程を通して働くことや生活すること、余暇の過ごし方などについて新たな知識やイメージを作る支援を行いたい。例えば作業学習や現場実習等を通じて、自分なりの「働くこと」のイメージをもったり適性を考えたりする手段の一つとしてもらいたい。

【高校生というこの時期を大切にする】

高等部では、同年代の友だちや先輩をモデルにして自分が直接体験していない事に対してもイメージをもてたり、あこがれたりすることができるようになる生徒もでてくる。友だちが行った現場実習の映像を見たり話を聞いたりする中で「自分もやってみたい」と言う声を聞くことができたように、今まで考えてもみななかった自分の可能性や「やりたい、なりたい」が見えてくることがある。私たちはそういう機会を積極的に作り、生徒のイメージを広げる一助としたい。

また、大目標として設定はしなかったが、高校生という年齢では「彼女、彼が欲しい」

「かっこよく、素敵に見られたい」「もてたい」といった願いをもつ生徒もでてくる。自分の将来に対して考え始める時期の生徒にとっては大切な願いの一つであり、そういった思いを基盤として頑張る力や取り組む意欲が生まれてくることも多い。大目標だけにとらわれず、この時期の多方面にわたる生徒いろいろな願いの上に、より豊かな未来につながる芽があることを認識しておきたい。

(3) 成果

①教師の意識の変化

本校では従来から「子どもから出発する」ことを共通理解して実践や研究を行ってきたが、目標そのものについては生徒の弱い部分やできていない部分に注目したものであった。「『なりたい自分』を支援する」という今回のテーマで研究に取り組むことで、「この子をどうしたいのか」から「この子がどうしたいのか」への意識の転換ができたのではないか。また、「できる・できない」といった能力的な評価に加えて、「生徒の内面の成長」といった新たな評価の視点ももつことができた。

目には見えない内面世界に働きかけていく実践は始まったばかりであり、分からなかったりできていない部分はまだまだ少なくない。実際の実践の中では、教師主導で行っている部分も多い。それは時として必要なことだが、当事者は生徒自身であることを常に意識できるようにしていきたい。

②高等部の教育課程

日々の実践の中で、生徒の「やりたい、なりたい」気持ちにより添いながら内面世界をどう育てるかを考えて授業を行おうとした結果、1年生の生活単元学習や、家庭科の授業に大学生と行った「男女交際」の授業実践ができた。生徒のニーズや目線により近い教育内容や、具体的な場面の中で何を学ばせるかを考える一端となった。教師の意識が変化することや、生徒の本当に学んだり経験したりしたいのはどのようなことなのかを考える中で高等部の教育課程の見直しができるのではないかと考えている。

(4) 課題

①生徒の多様な実態への対応

これまでの事例対象生徒は話ができる生徒達であった。しかし、高等部の生徒の実態は多様である。思いや要求を言葉で伝えるのが難しい生徒とはどのように目標を共有し、何をもって内面世界を読み取っていけばよいのだろうか。本人の好きなことを見つけようとしたり、その思いを表情から読み取ろうとしたり、保護者と話をしたりしてきたが、まだまだ実践不足の感は否めない。今後のさらなる実践の積み重ねが必要なところである。

②大目標設定や内面世界を読み取るためにかかる時間

本人の願いを目標化したりその内面世界に迫ったりする際に、生徒に問い返し話を聞き取っていくのは有効であったが、教師間で何回も話し合うことが必要であった。生徒の「やりたい・なりたい」と保護者の希望と教師の問題意識がそれぞれ別の方向を指し示した場合、共有できる目標に集約するまでには非常に時間がかかった。また、生徒の言葉から内面世界の変化や成長を探るため複数の視点をもち寄って話し合いを重ねた。時間短縮は課題であるが、そればかりに目を向けると本来のねらいからそれる危惧もある。

目標の設定に当たっては、高等部段階では本人も保護者も「やりたい、なりたい」ことが将来の生活や就労につながっていくことが多い。卒業を控えた学部として目標自体が進路に関するものや社会性のあるものなど、いくつかの共通する部分が見えてくるのではないかと考えている。

③個別の目標に沿った教育内容と集団への指導

個人の目標を達成するための学習内容を考えることができて、授業の中では集団で指導することが多い。生徒一人一人の目標を教師が把握して授業に臨むだけでもその問いかけや発言は違ってくると思われるが、集団の授業の中でその生徒の目標を達成するためにどのような観点が必要かを考えていかなければならない。

④社会や他機関との連携

事例でも見られたように、高等部の生徒の「やりたい、なりたい」は、ある程度社会性を帯びてくる。「一人暮らしをしたい」事例では、家庭とも連携して保護者の承諾のもとグループホームでの定期的な宿泊体験を行った。その中で模擬的な生活訓練棟での宿泊体験やスキルの学習への支援はできて、一人暮らしの寂しさや精神面での大変さを実感できるようにするのは難しかった。生徒の願いによっては、支援の場や人を校内だけにとどめずに、いろいろな社会資源や関係機関との連携の可能性を探っていくことが必要であると考えている。